

めだか談義

メダカ発、世の中つれづれの記。2021・9・27



メダカの学名は、「*Oryzias latipes*」(オリジラス ラティペス。正確にはミナミメダカの学名)。なんとも発音しにくい、舌を噛みそうな名前です。これは「田んぼに住むヒレの大きな魚」という意味です。英語では、「Rice fish」と呼びますが、「Medaka」で国際的に定着もしているとも言われています。それだけ、日本ではメダカが特別に愛されてきたのでしょうか。なにしろ、日本全国で4600以上の、その土地独特のメダカの呼称があったのだとか。日本中で稲作が行われていたことがよく分かります。それにしても4600とは、ひとつの村、そして隣の村で呼び方が違っていった可能性もあるわけで、言語学的にみても方言の多彩さに驚くばかりです。「目高」と名付けたのは、江戸時代初期の本草学者、貝原益軒です。メダカは、東南アジアの稲作文化の地域に分布して、日本が、青森県が、その北限とされていますが、作今は、温暖化の影響もあるのでしょうか、北海道の稲作も盛んになり、そこでも生息しているという説もあります。ただ、それはどう考えても、人間が持ち込んだとしか思えない、つまり、僕らがこだわる「在来メダカ」とは言えませぬ。日本のメダカは、キタノメダカ(学名 *Oryzias sakaizumi* 青森から北陸の日本海側)とミナミメダカとに分類され、桑原のメダカは「ミナミメダカ東日本型」に属します。1999年までの20年間の調査でその遺伝子に大きな変化は見られず、極めて、在来性の高い地域個体群として維持されてきたことが証明されている、大変、貴重な存在でもあります。21世紀になってから20年余り、遺伝子調査が行われたという報告は残念ながら聞きません。

在来性、それも重要なポイントですが、田んぼに依存しているメダカたちにとっては、田んぼの減少こそ火急の問題。遺伝子の維持よりもたいせつな、「生きる」ことそのものを脅かされる緊急事態、「立ち退き」を宣告されたも同然なのです。メダカだけでなく、田んぼは、水生昆虫や、鳥、両生類、植物たちが、それぞれの役割を果たしながら、まるでオーケストラが交響曲を奏でるように「生態系」を成り立たせている、いわば「音楽堂」のような場所です。このほど、会が参加することになった「SAVE JAPAN プロジェクト」の目指すのは、「いきものが住みやすい環境づくり」を全国共通の大きなテーマとしています。各都道府県からひとつの環境系の市民団体が選ばれ、たくさんの市民参加の環境保全イベントを実践するというものです。対象となる期間は1年間。この10月から来年9月までの1年のなかで、それぞれの市民団体がイベントを開催することになります。そして、その活動報告が随時、SAVE JAPAN のホームページにアップされていく展開になります。当会は、参加にあたり、イベントテーマを「田んぼを守れば、メダカも守れる」とし、休耕田を活用した田んぼの、「100人稲刈り」と「100人田植え」の2回のイベントを企画しました。10月23日に行う「100人稲刈り」の田んぼは、「おだわら農人めだかの郷」の皆さんが6月に田植えをした田んぼです。僕たちもお手伝いした711号線沿いの細長い田んぼも含まれています。

10月後半の稲刈りなので、酒米となります。「吟のさと」という品種で、酒米として一番人気の「山田錦」のDNA受け継いでいます。大井町の井上酒造さんに収められ、「左岸」という日本酒となります。100人の皆さんには、稲刈り後の「わらの家」づくりや、わらを利用したお正月飾りづくりやXmasリースづくり、真冬の酒蔵見学会などの小イベントのお誘いも継続し、また、田植え後の草取りなどの農業体験イベントも含め、年間を通したお付き合いをさせてもらう計画です。そして、もうひとつ重要なのは、これらのイベントのメッセージ性です。メダカに象徴される生態系を未来に残そうとすることにどんな価値があるのか、これを、SAVE JAPAN プロジェクトを通して、全国にアピールできること、桑原という生物多様性に富んだ里地が環境意識の高い全国の皆さんから熱い視線を集められること、それは必ず、大きな見えないチカラとなって、僕たちを元気づけてくれるに違いありません。そのためにも、皆さんの協力をお願いしたいと切に願っています。もうすぐ案内チラシも出来上がります。少しお待ちください。

「田んぼを守れば、メダカも守れる」、と思う。